

四国西南端の無人島探検

甲 藤 次 郎 (元所員・高知大学)

JiRO KATTO

ここに紹介する蒲葵島及び姫島は 四国西南端にある小さな無人島である。 いずれも四国本土から指呼の間にありながら 絶えずザワザワと波頭をたてながら北上する黒潮によって隔絶された世界である。 島の周囲は 近づくとのけぞりそうな大断崖で海と接している。

両島は 足摺宇和海国立公園の特別保護区に指定されているが 筆者は高知県・高知新聞社共催による地質及び動植物の調査を自

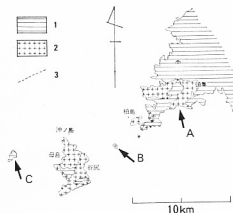
的とした学術調査団の一員として 53年度に蒲葵島を そして54年度に姫島を調査したので その一端をここに報告する。

本地域の地質は 古第三系(茶臼野層:甲藤・三井 1976)を基盤とし これを貫く中新世の花崗岩が所々に露出しているが 姫島は前者に 蒲葵島は後者に属する。

最後に 本文中の写真1・3・6は高知新聞社から提供して頂いたことを付記して謝意を表す。



写真1 風をまっけて めざす蒲葵島へ



第1図 蒲葵島および姫島の位置ならびに四国西南端の地質略図

A: 大堂海岸 B: 蒲葵島 C: 姫島

[凡例]

1: 古第三系 2: 花崗岩類 3: 沖ノ島における谷型花崗岩と母島型花崗岩との境界線



写真2 沖ノ島の母島港からみた姫島と 宿毛-柏島-沖ノ島-鶴来島を結ぶ巡航船

蒲葵島

蒲葵島は 全島花崗岩からなり 島の周囲は約 2.7km 標高約 140m のお椀を伏せたような小島で 柏島から約 2km の位置にある。島の頂上部は モクタチバナ・タブノキなどの密林で さらにそれを圧倒しているのが亜熱帯植物のアコウやピロウの巨木である。所々に手首ほどの太さのある長いカズラやアコウの気根が垂れ下がり まるで目隠しされたように空は全く見えない。さらにこの密林の地表をおおようにアオノクマタケランなどが異常に繁茂しており まさにジャングルである。また断崖に臨む中腹部には 背丈ほどあるハチジョウススキ・オニヒゲ

スゲなどの大群生がある。このような特異な植生は この小さな島に2000羽を越すといわれる天然記念物のオオミズナギドリの集団営巣があるからである。

オオミズナギドリは ふかふかした腐植土中にモグラのように縦横に巣穴を掘りめぐらしているし またなかには石の割れ目を利用してビル住いとしゃれたものもいる。

またこの島には 絶滅寸前といわれる天然記念物のカラスバトが十数羽いることが確認された。

蒲葵島の花崗岩は 含電気石黒雲母花崗岩（母島型花崗岩）であるが 三角点付近からは 紫蘇輝石花崗岩（谷尻型花崗岩）の転石が得られた。

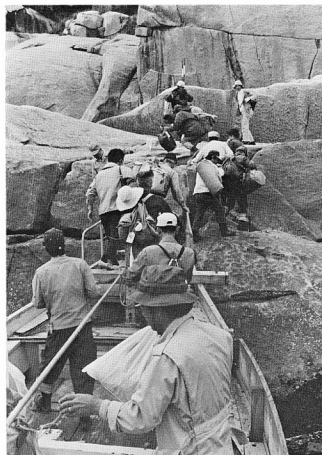
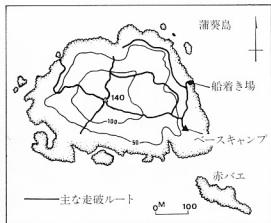


写真3 蒲葵島唯一の天然の船着場にとりついた調査隊の一行。花崗岩には 東西性・南北性及びほぼ水平の節理がよく発達しており この上陸地点の南北性割れ目からは ケイ酸 88.6 PPM（一種の鉱泉）が検出された。またこの船着場は明治時代にいわゆるグアノ（海鳥糞）採土の際に利用されたが 今日では旅行の対象となるグアノは全くみられない。



第2図 蒲葵島の踏査図



写真4 天然記念物のオオミズナギドリ

全長約 49cm。離着陸の不器用な鳥で 日暮から夜中にかけて帰巢し 密林の枝葉に体あたりして ドサリと墜落するようにして着地する。あたりどころが悪いと失心状態になるものもいる。未明の3時半頃には 岩場や樹枝上の手ごろなジャンプ台にガサゴソと集まり 滑走と落下のはずみを利用してバタバタと飛びたつてゆく。これが2000羽をこすのだからまさに壮観である。しかもビイビイ キャーキャーにはじまるかましい鳴き声と その合間にはビューウィ ミャーオ ウッパンというような甘く悩ましい鳴き声もさかんにまじるのであるから 夜中を通しての狂騒曲には尋常の神経ではとても耐えられない 5月という恋の季節だったからかもしれない

姫 島

姫島は島の周囲約4.5km 標高約156mの孤島で 母島港から西へ約5kmの位置にある。全島 古第三系(始新世~漸新世)の堆積岩からなる。

この島の大きさは蒲菜島の2.5倍位であるが その形を大きく規制しているのは 北50°東及び北60°西方向に発達する節理とそれに強く働く海食作用である。またこれにもとづく海食洞も多い。頂上部も複雑で ラクダのようなコブが2つあり その間に険しい岩場があちこちにある。地元でキレトウというのは切れた峠という意味だそうである。このように 姫島は優しい名前と裏腹に 蒲菜島よりむしろ男性的な流々しい島である。

植生はタブノキ・モクダチバナ・ヤブツバキ・ハマビワ・ウバメガシが優勢で 亜熱帯性のビロウやアコウも多い。また 種子の移動が極端に遅く 海峡を越えることの出来ないホシゼキカンアオイの分布が確認された。

またこの島でも 数は少ないが カラスバト・オオミズナギドリやミサゴ(ワシやタカの仲間だが魚が主食)が確認された。

地層は砂岩の卓越した砂岩頁岩互層で 一般走向・傾斜は N50°E・40°NW であり スランブ構造がよく発達する。また節理は N50°E・65°NW; N60°W・85°NE 及び N12°W・20°Wの三方向がよく発達している。

岩石は 地下浅所に花崗岩が貫入しているためか 鉱化作用を受けてはなはだ堅硬である。

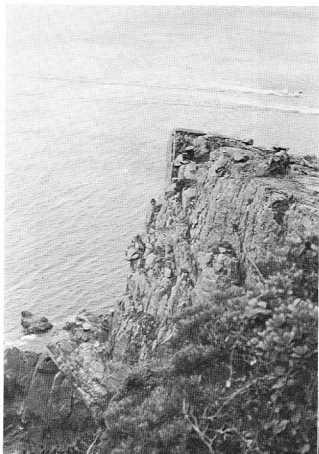
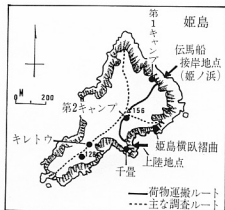


写真5 波静かな時に 大転石を利用して小型船舶がやっと接岸できる 姫島唯一の船着場の西側に屹立する千雲の断崖。この数10mの断崖の上端が20度位の緩傾斜面になっているのでこの名がある。この緩傾斜面は N12°W・20°Wの節理面そのものである



第3図 姫島踏査図



写真6 ホシゼキカンアオイの花。この発見は かつて姫島が陸続きだった証拠にあげられ 海峡によってきりはなされたかの時代論が話題のタネとなった。筆者はせいぜい1万年前以降説をとる

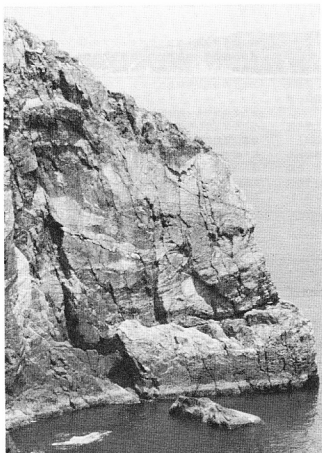
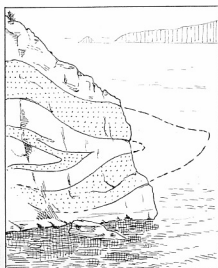


写真7
千雲北側の海食崖で命名した姫島横臥褶曲。
巨大なスランプ構造である（第4図参照）
むこうに見えるのは沖ノ島



第4図 姫島横臥褶曲の図解



写真8 千雲西北側の海食崖下の大転石にみられる砂岩頁岩有律互層のスランプ構造。人物は この孤島で恐らく最初のハンマーをふるう私